

真理、祈り、書くこと — カフカのテキストの構成原理 —

古川昌文

0. はじめに

言葉はコミュニケーションの手段であると言われる。しかし言葉の前に、まず語られるべき事実や内容が先行して存在し、言葉はそれを伝えるために使われる手段・道具に過ぎないのだろうか。むしろ、事実や内容は、最も本来的には、言葉によって在るように見えるだけなのではないか。あるいは、仮にまず事実や内容が先行しているとしても、それを言葉という形に固定化したとき、表現されるべきであったはずの事実や内容は、言語によって裏切られているかもしれない。少なくとも、報道文のように直接事実と関わる（とされる）テキストと違い、言葉によって非事実的世界を構築していくと考えられる「文学」テキストの場合、言葉・表現に対応する「内容」が一義的に見出されるとは限らない（むしろ見出されないからこそ、それは「文学」テキストなのだ）。ポエのよく知られた詩に『烏』(The Raven)がある。この彼の代表作は、彼自身の言葉によれば、各連の最後に繰り返される“Nevermore”という陰鬱で哀切な響きを持つ一語を、最大限効果的たらしめるべく、詩の形式・内容が選択・構成された¹⁾。つまり、表現したい心情や内容が先行して存在し、それを表現するためにこの詩が作られたのではなく、“Nevermore”という語の「響き」こそが詩の出発点であり、また終着点でもあったのである。この本人の証言を信じるならば、『烏』に対するいわゆる「内容解釈」はすべて空を切ることになるだろう。

フランツ・カフカの物語テキストは、それに対する夥しい解釈の存在がすでに示しているように、テキストの意味を一義的に言い当てるのが極めて困難で

ある。カフカの物語テキストを読んでいると、予め（書き手の頭の中に）存在する対象世界を言葉を媒介として表現していくのではなく、逆に言葉によって初めて対象世界が構成され、この構成作用・内容に応じてまた別の言葉が呼び出されていくという印象を受ける。たとえば『訴訟』（Der Prozeß）を読んでいるとき、もともと存在していた裁判機構が何らかの理由でKの逮捕を命じたというより、Kが逮捕されたという冒頭の言葉に応じて初めて裁判機構が姿を現すという印象を受けないだろうか。世界を言葉で表現するのではなく、言葉が世界を創り出し、それが次なる言葉を、世界を呼び起こす。こうした世界は我々読者を不安にさせる。描かれる世界が我々にとって見慣れぬ世界であるという理由からだけではなく——見慣れぬ世界が描かれるのはカフカに限ったことではない——むしろ見慣れぬ世界の「現れ方」が不安を起こさせるのである。いったい、カフカのこうしたテキストはどのような原理によって構成されているのだろうか。また、なぜ、カフカはこうした物語を書いたのだろうか。以下では、カフカの物語テキストがもつ主な特徴を確認した上で、遺稿として残されたアフォリズムや日記に記されているカフカの諸省察・断片を読み解きつつ、これらを物語テキストと関連づけることによって²⁾、カフカにおけるテキストの構成の原理ともいうべきものを、さらにはその原理の背後に仮構されうるカフカの志向を探っていくことにする。

1. カフカの物語テキストの基本的特徴

・カフカの言語表現や語りの問題についてこれまで多くの議論が行われてきている。研究者（読者）をこうした議論へと向かわせる理由は、カフカのテキストが持つ独特の効果——それは「不安」「重苦しさ」「出口のなさ」といった主観性の強い言葉でしばしば表現される——にあるだろう。ここでは、カフカの言語及び物語構成上の主たる特徴を、従来の研究成果を踏まえながら確認してみる。

カフカの物語の特性をよく示すものとして“Die Bäume”³⁾がよく採り上げられる⁴⁾。ここでもこのテキストを通じて、後の考察で重要となる主な特徴を

3点取り出しておきたい(ここでは紙幅の都合から特徴を大掴みに取り上げるに止め、詳細な分析は別稿に譲ることとする。

Die Bäume

Denn wir sind wie Baumstämme im Schnee. Scheinbar liegen sie glatt auf, und mit kleinem Anstoß sollte man sie wegschieben können. Nein, das kann man nicht, denn sie sind fest mit dem Boden verbunden. Aber sieh, sogar das ist nur scheinbar.

いきなり“Denn”という理由の接続詞で始まる風変わりな書き出しにまず注意を惹かれる。このDenn文章が何についての理由説明なのか、テキストには記されていない。理由説明の前提となるべき文・内容が欠けているところから、テキストは必然的に「断片」的性格を強く帯びることになる。断片性—これはカフカの多くのテキストを特徴づける重要な要素である。テキストの断片性は、この“Die Bäume”がそうであるように、テキストがコンテクストを排除しているところから生じる。短編集『田舎医者』(Ein Landarzt)に収められた『掟の前』(Vor dem Gesetz)が『訴訟』から切り取られたものであり、「ヨーゼフ・Kは夢を見た」(“Josef K. träumte:...”と書き出される『夢』(Ein Traum)は、コンテクストとして“Der Prozeß”が想定される。これらはコンテクストが明確、あるいは再構成可能な例だが、そうでないテキストも、背後に何らかのコンテクストが隠されていることを感じさせるものが多い。テキストからだけでは読者の持つ解読コード(知識)ではデコードできないため、コンテクストの欠如を感じてしまうのである。また数多くの未完で終わるテキストが断片的性格を持つのは言うまでもない。テキストのコンテクストからのこのような切断をカフカがどの程度意図的に行っていたのかは分からない。ともかく結果として、読者が一義的に意味を了解しうるために必要な情報がテキストには欠如しており、この欠如が読者をしてその充填へと誘う。充填の仕方、内容によって、全く異なった解釈が生じうることは、カ

フカの膨大な二次文献目録がよく示しているところである。

引用テキストに戻ると、次の特徴として喩えの使用を挙げることができる。第1文で「私たち」(wir)が「木の幹」(Baumstämme)に喩えられている。喩えとは、通常、物事を分かりやすく、効果的に説明し説得するために用いられるものである。したがって、この喩えを用いることによって、「私たち」が分かりやすくかつ説得的に説明されることが当然期待される。だが、第2文以下では、最初の「私たち」は忘れられてしまったかのように、木の幹についての記述に終始し、「私たち」が結局どう説明されたのか、また「私たち」と木の幹とがいかなる意味で等価なのか、不明瞭なままに終わる。「木の幹」は喩えであったはずなのに、喩えられた瞬間、独自の運動を開始してしまうのだ。このとき、「木の幹」はもはや単なる喩えを超えた何ものかとなる。

引用したテキストをはじめ、カフカのテキストはメタフォリックな表現・描写の宝庫である。物語テキストのみならず、日記や手紙にもメタファーが好んで使用される。今見たように、“Die Bäume”では、最初に「私たち」が木の幹に喩えられるのだが、この喩えは単に何かの喩えであることを超えて、それ自体で運動を開始する。この運動を他のテキストに逆にあてはめて考えてみると、たとえばW.Baumgartnerが言うように、『変身』における主人公グレゴール・ザムザの虫への変身には、その出発点として「ザムザは自分を虫のように感じた」という比喩を想定することができるだろう。この比喩が、「ザムザは虫だ」という等置(隠喩)となり、さらには隠喩が独り歩きをして、そのまま物語内の現実となって展開していくと考えられるのである⁵⁾(もちろんこういう解釈も先に述べたコンテキストの欠如—この場合、なぜ変身したのかについての説明の欠如—を充填する方法の一つに過ぎないのだが)。カフカのメタファーの大きな特徴は、メタファーがメタファーであることを超えて、言葉が字義通りに受け取られ、そのまま物語内の現実となって展開するところにあると言えるだろう。

“Die Bäume”の3つめの特徴として否定の連なりを見て取ることができる。木の幹の状態についての最初の記述「ちょっと押せばどかすことができる

はずだ」は、次の記述「大地と固く結び付いているからそんなことはできない」によって否定され、この記述もさらに次の記述「それさえも見せ掛けにすぎない」で再度否定される。この否定の積み重ねが、木の幹の置かれた状態について、明確な像を描くことを困難にする一つの原因になっている。こうした「止揚なき弁証法」⁹⁾は、たとえば『城』(Das Schloß)における、登場人物たちの言明が相矛盾していく対立の構図、『巢穴』(Der Bau)における仮定→帰結→その帰結の否定という永久に続くかと思われる否定の連鎖など、他のテキストにもしばしば共通して現れるカフカの基本的な特徴を成しているのである。

いま指摘したコンテキストの欠如(断片性)、喩えとその自立的運動、否定の構造という3つの特徴は、広い意味での「言葉遊び」(Sprachspiel)として享受することもできる。この「言葉遊び」というレベルで、その技巧をより詳細に分析することは可能であろうし、興味深いことでもある。“Die Bäume”もそうだが、カフカの短編やノートに残された断片からは、言葉の持つ可能性を試そうとする試作・習作とも思われるようなテキストが数多いのである。しかしカフカがほぼ生涯にわたって、おそらくは身を削るようにして、そのような文章を書き続けたという事実からは、単なる言葉遊びとは言い難いものを感じないではいられない。本論の問題関心は、そうしたテキストの特徴がカフカのどのような志向に根差しているのか、またそれによってカフカは何を目指していたのかという点にある。

2. カフカにおける言葉と「書くこと」

「言葉遊び」という性格は、むしろカフカの特異性とは言えない。書かれた言葉がそのまま物語世界の現実となることを先に指摘したが、これもまた、物語テキストには虚構の世界が描かれているという前提に立つ以上、物語テキストが持つ最も本来的な性格であるはずだ。カフカの場合には、この性格が、現実(我々の既知の世界)との指示関連を意図的に排除することによって、極端なまでに利用されているのだと言うこともできるだろう。いずれにせよ、テキストは言葉によって織られている。そもそもカフカは言葉というものについて

どのように考えていたのだろうか。

言うまでもなく言葉は一つの制度であり、各自が全く自由に作り出したり変更したりすることはできない。カフカが書き残した文章には、この言葉という制度に対する齟齬・違和の感覚が、特に初期の段階でしばしば見出される。たとえば友人マックス・ブロートに宛てた1910年の手紙の一節。

「私は書くことができない。私は自分で認められるようなものを一行も書かなかった。（中略）私の身体全体が私にあらゆる語に対して警戒を呼びかける。どの語も、私によって書かれる前に、まず四方八方を見回す。私の文は文字通り粉々に壊れる。私にはそれらの文の内部が見えているのだが、しかしその時はすぐさま中止しなければならない。」⁷⁾

同じ年、12月27日の日記には次のように書いている。

「私の書く語はほとんどどれも次に来る語にそぐわない。（中略）私の疑いが個々の語の周りを輪をなして取り囲む。私には語そのものよりもその疑いの方が先に見えてしまう。しかしそれが何だというのだ！そもそも私は語を見るのではない。私が語を作り出すのだ。」

「私の力はただの一文を書くためだけでも、もはや不十分だ。そう、言葉が問題になるようなとき、一語を置くだけで十分だったならばどんなにいいか。そしてそれだけでもうこの語は完全に充足されたという満足感を抱いて、別の仕事に取り掛かることができたならば。」⁸⁾

言葉に対するこうした違和の感覚、そして思うように書けないことに対する無力感や苛立ちは1912年に『判決』を一晚で書き上げる頃まで続いている。ただ、「私は語を見るのではない。私が語を作り出すのだ」という上の一文には、語の日常的・制度的使用を超え出て、独自の語の使用へ向かおうとする意志が見て取れることは注意しておきたい。

カフカの言葉に対する違和感は、世界に対する違和感として、あるいはほぼ同じことだが、自己の存在の不確かさの感覚として、『ある戦いの記録』(Beschreibung eines Kampfes)をはじめ、カフカ初期の散文の特徴を成している。

1917年にカフカはアフォリズム風の短文を集中的に書く。しかし上の引用文から数年を経過したこの時期になると、言葉に対する違和感や無力感よりも、言葉に対するかなり明確な考え方が見られるようになる。たとえば1917年に八つ折版ノートに書かれた次の文からは、上述のような言葉(語)に対する違和や自分への苛立ちを突き抜けて、一種の洞察ないしは覚悟を読み取ることができるだろう。

「言葉は感覚世界以外のすべてに対してただ暗示的にしか用いることができない。しかしまた、ほんの近似的にでも比喩的に用いることもできない。なぜなら言葉は、感覚世界に対応して、ただ所有とその連関を扱うだけなのだから。」⁹⁾

ここには、確かに言葉の持つ限界への洞察が示されている。しかしそれだけでなく、言葉を「暗示的に」(andeutungsweise)用いることによって感覚世界の外を指示することができるという積極的な考えも同時に読み取ることができる。感覚世界とは、我々が日常見たり聞いたり触ったりする外的世界のことと考えていい。しかし感覚世界の外とは一体どう考えればいいだろう。上に引いた文の少し前には次のようにある。

「一つの精神世界以外に何も存在しない。私たちが感覚世界と呼んでいるものは、精神世界における悪であり、そして私たちが悪と呼ぶものは、私たちの永遠の発展の一瞬間の、一つの不可避なものに過ぎない。」¹⁰⁾

これによると、感覚世界の外とは精神世界のことであると読める。すると、

言葉は感覚世界に対応するものであり、精神世界を直接的にも比喩的にも描くことはできない、ただ暗示的に用いることができるだけだ、ということになる。では、暗示的に用いるとはどういうことなのか、そして精神世界とは。

言語の暗示的な使用ということについて明確な説明はなされていない。しかし「暗示的」という言い方から、カフカのテキストの特徴との関連を考えることができそうである。つまり、カフカの物語テキストがもつ特異な形式は、現実的・感覚的世界に対応しているはずの言語を用いながら、感覚世界の外を暗示しようとする試行が取る形式であると考えられるのではないか。日常使用される言葉はコンテキストの中に置かれ、それによって一定の意味の理解が可能になる。しかしそうであればこそ、言葉は常に感覚世界の連関（コンテキスト）に取り込まれてしまい、感覚世界の外を言い表すことができない。だからといって、コンテキストから引き離されてしまえば、言葉は意味をなさなくなる。このことは、言葉が一つの制度であることからくる必然である。しかし、カフカの場合は、言語の日常的使用から逸脱することなく（完全に逸脱してしまえば、単なる無意味となる）、従って感覚世界に対応した言葉を用いながら、しかし全体として、その言葉が対応しているはずの感覚世界から離脱するという形で構成されているように見える¹¹⁾。これは言葉の可能性を最大限に利用しようとする形式であるとも言える。前節で見た“Die Bäume”は、決して特異な語や言い回しが選ばれているわけではなく、むしろありふれた言葉で書かれている。テキストとしての結束性（Kohärenz）も完全に保たれている（Die Bäumeというタイトルを除けば）。その意味では、“Die Bäume”は決して理解の困難な、ましてや不可能なテキストとはいえない。ところがテキストの全体はといえば、すでに確認したように、読み進むにつれて一義的な意味づけから逃れていく。その原因の一つが否定の連なりであることは先に指摘した。

否定構造の持つ意味は、カフカのいう感覚世界に対応する言葉（日常的言語）の特徴を考えてみるとよく分かる。日常言語は基本的に肯定的である。通常、否定はそれ自体を肯定として行われるか、或は肯定を求めて行われる。例えば、

「AはBでない」という否定文は、通常、「AがBでない」こと自体を事実の叙述として肯定的に述べているか、あるいは「Aは本当はCである」という肯定の存在を前提とし、求めている。言語は世界のポジティブな意味づけなのだ。これに対して、肯定的な言辭を否定し、さらにその否定をも否定するというカフカのテキストには、制度化された言葉が持っているそうした肯定性から逃れようとする運動を見ることができる。カフカの次のアフォリズムは、テキストのこうした否定構造と関係づけられる時、最も妥当な理解に近づくように思われるのである。

「否定を行うことが尚私たちに課せられている。肯定は既に私たちに与えられている」¹²⁾

ここでいわれる肯定 (das Positive) とは、感覚世界とそれに対応する言葉であると考えてみよう。だとすれば、それは既に我々に与えられている。従って感覚世界の外を指示するためには、言葉の通常の使用によることはできない。そこで否定を行うこと (das Negative zu tun) によって、すなわち言葉を「所有とその連関を扱うだけ」の機能から解き放つことによって、カフカの言う感覚世界の外を指示することが課題となるのである。

こう考えるならば、前節で確認した喩えの独り歩きという特徴もこの文脈の中で解釈することができる。喩えが喩えである限りにおいて、それは感覚世界の外に出ることはできない。先のアフォリズムに言うように、「言葉は感覚世界以外のすべてに対して (中略) ほんの近似的にでも比喩的に用いること」(傍点筆者) はできない。比喩とはあくまで感覚世界に対応するものであって、感覚世界の錯綜した事態をより分かりやすく、より効果的に記述・説得するためのレトリックである。従って、そうであるがゆえに、比喩によって感覚世界の外を記述することはできないのだ。しかし喩えが字義通りに受け取られるとき、すなわち喩えとしての出自が忘却され、喩えであることを超えてそれ独自の運動を開始するとき、言葉は感覚世界の呪縛から解き放たれる、あるいは少

なくともその可能性を、希望を見出す。喩えは、それ自体としては感覚世界の外に出られないが、感覚世界を直接的に叙述するものではないという点で、そうした可能性、希望の拠点となりうるのである。カフカのテキストのメタフォリックな、また寓意的な性格は、このような希望の中にその存在理由を捉えることができるのではないか。

この意味では、喩えの独り歩きという現象は、感覚世界に対応する言葉、言い換えると制度的言語、に対する「否定」であると言うこともできる。つまり否定構造の枠組みの中で捉えることができる。そして、感覚世界との対応を離れて独り歩きすることによって、喩えは言葉の一義的理解を可能にするコンテキストを必然的に失う、というより、そうしたコンテキストの呪縛から解放される。カフカは喩えを独自の形式において使用することによって、コンテキストを脱し、感覚世界の外を指示することを目指していたと考えられはしないだろうか。

ところで感覚世界の外とは精神世界のことであった。では精神世界というありふれた、しかし多分に曖昧さを含んだ言葉ははたして何を指示しているのだろうか。この問いに正面から答えるのは難しいが、次節では「真理」の問題と絡めながらその輪郭を探っていくことにする。

3. 真理を志向する言葉

先の引用によれば、感覚世界とは「精神世界における悪」であり、本来的には「精神世界以外に何も存在しない」。するとこの時、感覚世界は次に引用する「嘘」と重なり合っ て見えてくるであろう。「精神世界以外に何も存在しない」のであれば、感覚世界とは虚の世界に他ならないはずであるから。

「真理と嘘、この二つがあるだけだ。真理は分割できない、従って真理が自分自身を認識することはできない。それを認識しようとする者は嘘にならざるをえない」¹³⁾

感覚世界が嘘に対応するとすれば、精神世界は真理に対応することになる。しかし「真理は分割できない」のだから、認識しようとする努力は無駄であり、「嘘」になってしまう。真理とは認識の対象ではないのだ。したがって、「一つの精神世界」もまた認識することは不可能であることになる。

「一つの精神世界以外に何も存在しないという事実は我々から希望を奪い、そして確信を与える。」¹⁴⁾

真理が分割できないように、一つしかない精神世界は分割できない、したがって認識することはできない。このことは我々から精神世界を、真理を認識するという「希望」を奪う。残るのは、しかし「一つの精神世界がある」という未だ確認されていないはずの確信なのである。

カフカにおいて精神世界が認識しえないと考えられていることは、彼の心理学に対するコメントからも窺い知ることができる。周知のように、心理学に対してカフカの態度は否定的である。心理学とはまさしく「精神世界」を探究するはずのものであるにもかかわらず。

「心理学は焦りである。人間のあらゆる過ちは、すべて焦りから来ている。周到さを早々に放棄し、もっともらしい事柄をもっともらしく仕立ててみせる、性急な焦り」¹⁵⁾

心理学に対するこうした否定的態度は次のように考えることができるだろう。カフカによれば、真理、精神世界は分割できない。そして「真理が自分自身を認識することはできない」から、従って、それを対象化して外部から分析、記述することはできないはずである。ところが心理学は、人間心理を対象として扱い、分析し記述しようとする。この時、心理学によって分析・記述される精神世界は、カフカのいう分析・記述の不可能な「精神世界」とは別物と化し、「真理」ではなく「嘘」になる。精神世界を内面世界と言い換えるなら、「内

面世界はただ生きられるのみであって、これを記述することはできない」¹⁶⁾からである。

「内面世界はただ生きられるのみ」というこの言葉は、「誰もが真理を見ることができるわけではない、だが真理であることはできる」¹⁷⁾という別のアフォーリズムと響き合う。これらの言葉からかなりはっきりしてくるのは、カフカのいう真理、そして精神世界とは、認識の対象や具体的な到達目標というより、生きること（そして書くこと？）そのものの中にある何かだということである。それは対象ではないがゆえに、認識できず、名づけられない。

「自己認識には悪があるだけだ」¹⁸⁾という言葉も、この文脈に置いてみると、了解可能なものとなりうる。二重の意味が読み取れるだろう。一つは、自己（精神世界）を認識しようという試み・行為それ自体が、すなわち認識作用が、分割しえないものを分割しようとする誤った試みであり、ゆえに嘘であり、悪なのだということである。もう一つは、自己認識によって認識された内容、すなわち認識内容が、偽物であり、ゆえに悪だということである。しかしながら、精神世界とは当然何よりもまず自己の精神世界のはずであり、その限りで、精神世界、真理の探究は自己の探究に他ならない。だとすれば、自己認識を避けることはできない。そしてその自己認識が悪だというのなら、認識される自己は否定されなければならないことになる。八つ折版ノートには、「認識それ自体が慰めであるという点に出口があるかもしれない」と書かれた後、次のように続けられている。

「したがっておそらく次のように考えることもできるだろう。おまえはおまえ自身を消去しなければならない、と。そして、けれどもこの認識を歪めることなく、それを認識したという意識を支えにして、しっかりと自分を保持することだってできるだろう。このことは本当のところ、自分の髪を掴んで沼の中から自分を引き揚げた、ということである。物質世界ではおかしなことも、精神世界では可能なのだ」¹⁹⁾

この引用文の「認識」とは、むろん真理の認識ではなく、「おまえはおまえ自身を消去しなければならない」という認識であるが、この認識は、「自己認識には悪があるだけだ」という言い方からほぼ必然的に導き出されるものである。自己認識によって見出される自己が悪ならば、悪としての自己は消去されなければならないはずであるから。だが一方で、この引用のしばらく後に「私の自己認識は、たとえば自分の部屋についての私の知識に比べて何と乏しいことか」という文が続く。するとどうなるのか。おそらく、自己認識という悪を、悪と知りつつ尚遂行し、そこから頭わになる悪としての自己を消去していくという迂遠な方法が要請されることになるだろう。すなわち、自ら悪と規定した自己認識を敢えて遂行することによって、見出された自己を消去＝否定していくという、矛盾に満ちた、いつ終わるともされない営為である。この絶望的とも思われる営為を支えるのは、自己を消去せねばならないという認識を歪めることなく、なおかつ「しっかりと自分を保持する」(sich aufrecht erhalten) ことができるのではないかという希望——カフカの遙かに控え目な言い方によれば慰め——である。自己を消去しつつ、同時に自己を保持するということの矛盾は、自分の髪を掴んで沼の中から自分を引き揚げる、というミュンヒハウゼンさながらのアクロバットに喩えられる。むろん実行不可能な喩えである。しかしカフカにとってそれは不可能ではない。「物質世界ではおかしなことも、精神世界では可能」だからだ。カフカのこの論理には無理があるかもしれない。しかし重要なのは、カフカにとってはこうした綱渡りの、あるいは飛躍した理路を通してしか、認識の向こう側に、認識を超えた真理を志向するしかなかったということであり、それがそのままテキストの構成原理をなしているように思われる点である。

4. カフカの物語の構成原理

1 節で確認した断片性、喩え、否定構造というカフカのテキストから取り出される3つの特徴は、以上の考察によって、否定構造という一つの特徴に包摂される。すなわち、断片性はコンテキストの否定として、喩えは「感覚世界に

対応」する言語の否定として捉え直すことができる。そしてこうした否定は、精神世界あるいは真理へと「至る」方法なのではなく、それらを志向しつつ「生きる」という終わりのない営為なのである。こう考えるならば、カフカが書くことと生きることを等置したことを、また、ノートに前後の脈絡なく記された「祈りの形式として書くこと」(Schreiben als Form des Gebetes)²⁰⁾という言葉が無理なく理解することができるように思われる。絶えることのない自己の否定、自己の消去を繰り返しながら、尚も自己を保持し、そうすることによって真理を生きようとする営為が書くことであるなら、それは限りなく「祈り」に似ているだろう。

以上、おおまかなスケッチとしてはあるが、カフカにおける「生」と「書くこと」、そして「生きること」と「真理」との内的な繋がりを考えてきた。このような仮定をするなら、そこからカフカのテキストの否定構造をひとまずは大枠において了解することができる。ここまで考察してきたことは、カフカの形式的な特徴に関してであって、テキストの具体的内容については完全に切り捨ててきた。最後にカフカにおける以上のような形式が内容とどう関係しているかについて若干考察を加えることによって、カフカにおける構成の原理ともいうべきものを定式化しておきたい。

カフカの物語には実に様々の要素が複層的に織り込まれている。しばしば指摘されるように、父親との関係や妹との関係、繰り返された婚約・婚約破棄の問題、ユダヤ性(教)、エロス等々、多様な要素が、様々なレベルで、とりわけ長編テキストには入り組んでいる。この多様性・多層性は、もちろんカフカの外的生活を反映しているには違いない。しかしその反映とは、外的生活を「表現」するという意味ではない。むしろ外的生活は制約であり桎梏であって、排除されるべきものである。それは、外的生活に影響され支配される限り内的生活もまた同様である。つまり、外的な諸要素の反映とは、外的なものを排除し否定するという意味での、ネガティブな反映なのである。描かれるべきは内面生活であり、精神世界なのだが、それは外的生活及びそれに支配された内的生活によって妨げられている。カフカの「書くこと」は、この桎梏を取り除く

ことから始めねばならず、ほとんどそれに終始する。

カフカのノートには次のようなアフォリズム風の断片も発見される。

「…彼には自分がある家族の強制の下に生き、考えているかのように思われた。(中略) この知らない家族と知らない掟のために、彼は解放されることができないのだ。」²¹⁾

「否定するための力、絶えず変化し、新しくなり、死につつもまた甦る人間という戦う有機体の最も自然な表現、それを私たちはいつでも持っている。が、そのための勇気がない。しかし生きるとは否定することであり、それゆえ否定は肯定である」²²⁾

結局、否定されるべきは外的な諸要素だけでなく、むしろそれ以上に、未知の強制の下にある自分である。いつのまにか自分の生と思考を支配している諸力を否定すること、それは自分を否定することに他ならない。このためには、すべてを「私」のレベルに還元し、「私」のレベルに還元されたすべてを否定していかななくてはならない。こうして「私」へと還元していく作業を「主観化」と呼ぶなら、カフカの「書くこと」は、主観化を徹底して行うことであったと言える。否応なく襲いかかってくる外部や、その外部と自己との関係は、すべて自己=私のレベルへと主観化され、主観化されたものは、これまで述べてきたように、否定を重ねられていくのである。言い換えるなら、カフカは現実レベルの問題を、現実レベルにおいたまま (=自分と距離をとって)、ある立場や思想の下に語ることは決してなかった。この意味でカフカのテキストにはテーマがない！カフカのテキストから一定のテーマや予め意図された「意味」を取り出そうとする試みがうまくいかないのはおそらくそのためである。カフカ自身にも、自分の書いたものの「意味」が、書く前はもちろん、書いた後も必ずしも明瞭に意識されていたわけではないことが日記や手紙からも推測できる²³⁾。このことは、カフカが書くときに行う主観化がいかに徹底していたかを物語っている。夢を見る主体が自らの夢の意味を知らないように—夢はまさしく完

壁に「主観化」された世界である——、カフカのおそらくは意識的な主観(=自己)化は、自分の書くものの意味を知る「客観」視点を排除(否定)するところまで徹底して行われていたと考えられるのである。

カフカの「否定」という行為は、従って、主観化を行う際にも、またこの主観/自己のレベルにおいても行われていたと言える。その中において常に志向されていたのはおそらく真理であり、真理を生きることであった。否定の過程の中に、あるいは否定の向こう側に生きられる(かもしれない)真理がどのようなものであるかは、他ならぬ「感覚に対応する」言語によっては言い表わすことはできないであろうし、臆ろげながらも表象することさえ難しい。しかし、はっきり言えることは、その真理がいわゆる科学的・客観的真理などではなく、主観/自己、要するに「私」にとっての真理だということである。この「私」というのは、外部世界や他の「私」(他者)と相関し合う結節点としての「私」ではなく、いわば唯一的・絶対的な「私」である(「一つの精神世界以外に何も存在しない」)。しかし、カフカにおけるこの「私」は分け入っていくと尚錯綜した問題を孕んでおり、稿を改めて論じる必要があるだろう。本稿では、カフカの「構成の原理」として、主観化を通して自己が否定され、それによって真理を生きることが目指されるという抽象的な定式化にひとまずは止めておこうと思う。序でながら一つだけ言っておくと、カフカが多くの読者を惹きつけてきたという事実は、彼の言語世界が、徹底した主観化を行うことによって、逆説的に、制度的言語/制度的感覚世界とは異なる別の世界を我々が共有していることを示唆しているということである。その世界を真理とは言わないが、少なくともカフカの言語世界は一種の言語批判として制度的言語/感覚を相対化し、それとは異質な、しかし可能な世界を確かに垣間見せてくれるのである。

【注釈】

カフカのテキストは次のものを使用した。

Franz Kafka, Gesammelte Werke, hrsg. von Max Brod, Taschenbuchausgabe in sieben Bänden, Fischer Taschenbuch Verlag, 1983

このうち本稿で引用する巻については、以下のような略号とともに頁数のみを示す。

BK.: Beschreibung eines Kampfes

Br: Briefe 1902—1923

E: Erzählungen

H: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß

T: Tagebücher 1910—1923

- 1) エドガー・アラン・ポー『構成の原理』(福永武彦他編・訳『詩と詩論』東京創元社、1979年所収)
- 2) カフカの日記などにおける記述を物語テキストの解明に利用するためには、前者が後者と別のレベルにあるという仮定を認めなければならない。このことには問題がなくはないかもしれない。カフカの書くものには、物語であろうと日記であろうと、そこに質的差異はないとする議論が、M.プロートのカフカ論をはじめ、古くからあるからである。しかし日記や手紙で自らの物語について説明や解釈が行われている以上、両者に差異がないとするのはあまりにも「文学的」な思い込みが強すぎる気がする。ただ、アフォリズムの類に関しては、その位置付けは微妙である。本稿では、アフォリズムを物語テキストのメタテキストとして読むことができる、すなわち、前者はより抽象度の高いレベルから後者を説明すると見なすことができる、という前提にたって議論を進めることにする。
- 3) E.44
- 4) このテキストの詳細な分析からカフカ論を展開したのものとして次のものがある。
Kobs, Jürgen: Kafka. Untersuchungen zu Bewußtsein und Sprache seiner Gestalten, Bad Homburg. 1970
- 5) Baumgartner, W.: Kafka und Strindberg, in: Nerthus 2, 1969, S.30f.
- 6) Bezzel, C.: Natur bei Kafka, Studien zur Ästhetik des poetischen Zeichens, Nürnberg, 1964, S.40
- 7) Br.85
- 8) T.27
- 9) H.68
- 10) H.67
- 11) この点ではブレヒトの「異化効果」(Verfremdungseffekt)とも共通性があるといえるが、もちろん同じではない。技法上の差異もさることながら、「対象(出来事)を異質な文脈・場面に置くことによって対象の自明性を剥ぎ取り、それによって観客に一定のショックを与えようとする異化」(Vgl. Otto.F.Best: Handbuch literarischer Fachbegriffe. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Mein, 1982)は、後に

述べるように自己否定を契機とするカフカの否定構造とはその目的において根本的に異なると言わざるをえない。

12) H.61

13) H.73

14) H.69

15) H.53

16) H.53

17) H.69

18) H.62

19) H.53

20) H.252

21) BK.219

22) BK.221

23) この点を捉えて、E.Andringaは『掟の前』(Vor dem Gesetz)を論じて、「このテキストが書かれる際には特定の意味や意図はなかった」と述べ、語り手や著者(=カフカ)もまた解釈者の役割をしていると言う。Andringa, Els:Wandel der Interpretation. Kafkas 'Vor dem Gesetz' im Spiegel der Literaturwissenschaft, Westdeutscher Verlag GmbH, Opladen, 1994, S.19

Wahrheit, Gebet, Schreiben—Kafkas Prinzip der Textkonstruktion

Masafumi FURUKAWA

Über die Erzähltechniken von Kafka ist bisher von mehreren Forschern diskutiert worden und jetzt noch umstritten. In der vorhandenen Arbeit werden die für Kafkas Erzähltexten charakteristische Merkmale herausgefunden und danach wird eine Interpretation davon versucht, warum Kafka solche eigentümlichen Texten fast fürs ganze Leben geschrieben hat.

Im ersten Abschnitt werden am Beispiel einer kleinen Erzählung "Die Bäume" drei Merkmale hingewiesen, die man auch in seinen vielen anderen Texten finden kann: Selbstentwicklung des Gleichnisses, fragmentarischer Charakter und negative Struktur.

Im zweiten wird es durch die Analyse der Kafkas Lebensdokumente (Tagebücher, Briefe, aphoristische Fragmente aus dem Nachlaß) gezeigt, daß diese drei Merkmale als der Ausdruck seiner negativen Einstellung zur institutionellen Sprache verstanden werden können.

Die negative Textstruktur wird im nächsten Abschnitt im Licht des Begriffs "Wahrheit", den Kafka u. a. in den Aphorismen mehrmals benutzt, in Betracht gezogen. Die Wahrheit kann für ihn nur nach oder mit der Verneinung des Ichs, wenn auch nicht erreicht, "gelebt" werden. Man kann sagen, daß diese Verneinung in seinem Schaffensprozeß zur negativen Struktur der Erzählwerken wird. Denn Schreiben ist für ihn, wie er selbst sagt, nichts anderes als Leben.

Kafka hat in einem Oktavheft ohne Kontexte “gekritzelt”: “Schreiben als Form des Gebetes.” Im Zusammenhang mit dieser oft zitierten Formulierung wird im letzten Abschnitt die oben erwähnte negative Struktur interpretiert und dadurch wird eine innere Beziehung zwischen “Wahrheit”, “Gebet” und “Schreiben” gezeigt.